

山と博物館

第41巻 第8号 1996年8月25日

大町山岳博物館

特集 野生の心 —日本ザルと共に— 戸谷 和郎 写真展 8/11~9/16



ニホンザルの親子

撮影 戸谷 和郎

高瀬川のサル

千葉 彬司

北アルプスの槍ヶ岳に端を発する高瀬川は、野生動物の豊富などとして知られており、かつてはカモシカなど各種の動物が狩られていた。

この渓谷の春の新緑、秋の紅葉は清流とマッチして見事な景観で、これらの変化に富んだ植物層が多く動物たちを育んできた。

この渓谷に当時東洋一と言われた発電用のロックフィル式ダム二基の建設が始まったのは昭和四十六年のことである。

このダムの建設により周辺の自然にどのような影響が現れているのか、追跡調査が大町市により昭和五十三年から三カ年にわたって行われ、ダム周辺には四群のニホンザルの群れが住んでいることがわかった。

冬、この流域は積雪が多い、サルたちはその時期は千七百メートル以下の河床地域の森林の中で身を寄せ合うようにして暮らしている。彼らはこの林中でノリウツギ、コシアブラなどの樹皮や冬芽をエサとしているわけであるが、中でもチシマザサなどのササ類がエサとして重要な部分を占めている。

雪深い北アルプスにも春は着実にやって来る。エサは今までの樹皮や冬芽から木々や草の新芽や若葉に変わる。

泉山茂之さん（長野県自然保護研究所）はこの流域で生活しているサルに電波発信機をつけその行動を追跡調査した。

その結果、このサルたちの一群は高山帯に登っていたことがわかったのである。

標高が高くなればなるほど新芽の発生する時期は遅くなる。サルたちはその新芽を追いかのように山を登り、六月下旬には二千六百メートル近くまで達し、七月から九月にかけて高山で過ごす。そして高瀬の紅葉が終わる木々の梢が寒風に鳴くようになる十一月下旬、再び元の河床に戻ってくる。

高山域に生活の場を求めるなどは、他の地域のサルには見られないことであり、北アルプスに住むサルならではの知恵なのであろうか。
(大町山岳博物館顧問)

野生の心

戸谷和郎

一 はじめに

これは、石川県白山の蛇谷へびたにを生息地として
いる一群の猿の記録である。この谷は、春夏
秋冬、見事なまでの変化に富んだ顔を見せて
くれる。その中で、日照りや長梅雨あるいは
冷夏といった気候変動は、餌となる果実の出
来に影響を与える。そのような年は猿にとっ
て厳しい冬となり、白く長い艶つやのなくなった
毛並みの猿たちを早春の山肌に見ることにな
る。特に、老いた猿には悲壮な表情が顕著で
ある。

私は十年にわたり彼等の生命いのちのドラマを見
させてもらった。老いたものは姿を消し、出
会いの中で生まれ、成長していく子供たち、



蛇谷の山並み

恥じることのない生き様を綿々と引き継いで
いく姿に接した。そしてこの度、一家族に絞
った十年の歩みをまとめた写真展「野生の
心」を大町山岳博物館で開催していただくこ
とになった。

猿の群は、母、子供、孫の血縁関係によつ
て強く結ばれた母系家族から成り立っている
いくつかの家族が集まって群れをつくり、メ
ス猿の順位ができる。そこに何頭かのオス猿
が加わり、メス猿に従ってオス猿にも順位が
でき上がる。

この双方にできる順位こそ群れ社会の中の
規律となり争いをなくしている。

一九六一年初秋、四十数頭であった蛇谷の
群れは暖冬の続く中、現在、八十数頭の大所
帯にまで成長した。

二 想いから行動へ

そもそも、私の活動は「自然な山の中に猿
の姿を見てみたい」、ただそれだけのことか
らはじまった。しかし、それだけのことにど
れぐらいの時間と歳月、無駄と思われる努力
さらには費用を費やしたことだろう。

この原動力になっているものは何なのであ
ろうか。

思いから行動へ、体験から知識に、仲間意
識から思いやりに……。今では猿とのつき合
いは心の想いに変わってきている。好いて惚
れて心で接することができるようになってき
たためであろうか。

少年時代、頭の中に描いた山の世界を今歩
いている。はじめの頃のがむしやら山歩き
に比較すると、穏やかな無理のない歩き方を
心得てきているようだ。自然の中に腰を据え



初冬、お互いの体を寄せ合い寒さから身を守る

き合い方を身につければ、子育てが楽になる
のでは。
彼等の生き様を通した自然。自然資産の宝
庫。これらへの認識を深めることは容易なこと
ではない。自然とはそうしたものである。

三 ユズリ家族との出会い

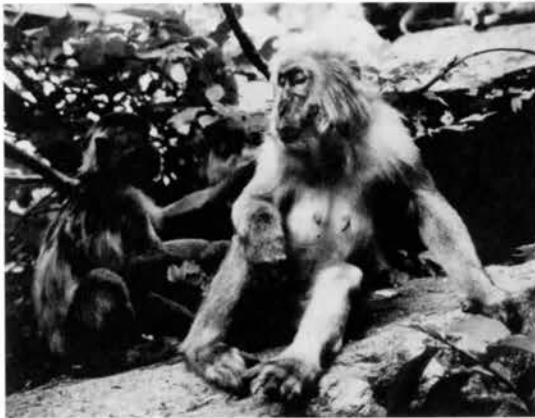
私が十年もの間追い続けることになったユ
ズリの家族に出会ったのは、既にメス頭ユズ
リがその地位に就いていたころであった。

ユズリにはボス猿ボス猿と三頭の子
(長女ユズ、次女キズ、三女グミ)が儲けら
れていた。三姉妹の性格は皆それぞれに違
う。長女ユズは優しくおとなしい、次女キズ
は活発で気が強い、三女グミは静かで控えめ
だ。後にお話ししていくことになる。特に三
女グミはメス頭の位置づけの受けつぎを早く
から捨てているようであった。そして、それ
ぞれの性格の現れは発情期を迎えたとき、つ
まりオス猿を選ぶときに顕著であった。

ボス猿の子である三姉妹。当然、どの猿か



蛇谷をいくユズリ家族(手前からキズ、グミ、ユズ、ユズリ)



老いを迎えたユズリ

老いを迎えたユズリ
 変わりはなかった。「せめて長女ユズの初孫を見るまでは……」思いは任せられない心を癒やすかのようにユズリは娘の毛づくろいをする。しかし期待した夢は破られた。その冬、

ら見ても一目も二目も置かれる存在であり、のびのびとした生き様が群れの中に刻み込まれた。子猿たちにはユズリとゾンとの間でくつろぐ姿があり、気分にあわせた気ままな毛づくろいの姿があった。いずれかの小猿がユズリの近くにいる。常にそばで過ごす子猿たち。ユズリにとってこのような生活は、言葉に言い尽くせないものがあつたであらう。だが、ユズリにも悩みがなかったわけではない。ユズリが元気なうちはよい。老いの中で育つ子供たちが小さすぎる。ボス猿交代も考えられる中で、メス頭への引き継ぎができるだろうか。結果的にユズリはこの悲哀をブライドとともに味わうこととなる。

四 世代交代からそれぞれの生き様へ

悲運が群れを、そしてユズリを襲った。ユズリの強力なバックアップの中でボス猿として在位に就いていたゾンが群を離れていってしまったのだ。そして、続けざまに貫禄とい

である。これによっておおよそ五ヶ月の間、ボス猿不在が続くことになった。

オスのナンバー3であるブンがようやくユズリへの道を歩みだしたその秋、とうとうユズリはメス頭の地位を追われることになった。それ以降ユズリに発情はこなかった。老け込みはますます増すだけであった。

新しいメス頭とボス猿の姿を離れて見つめるユズリの姿のその中に、老いとブライドの狭間に揺らぐ思いを見た。ユズリ親子にオス猿が加わることはもうない。しかし、ボス猿の近くで見かけることが多いのは、彼女のブライドとそうすることで子供たちの存在を支えていくかのようであった。秋のケガ、交尾ができない故に生じるオス猿とのトラブルにブライドがさらに拍車をかける。

しかし、子猿たちに囲まれて送る生活には変わりはない。「せめて長女ユズの初孫を見るまでは……」思いは任せられない心を癒やすかのようにユズリは娘の毛づくろいをする。しかし期待した夢は破られた。その冬、



大人になった長女ユズ



大人になった次女キズ

ついにユズリは長い生涯をユズの恋を見届けて閉じることになったのだ。

早春、三姉妹の姿に痛々しさを感じた。ユズの出産は空振りになりつつあったが、翌年ユズは群れを離れていくさだめのオス猿を、キズは群れに残るさだめのメス猿をそれぞれ出産した。そのときの相手が、ユズはナンバー2、キズはボス猿であった。

淡く煙る芽吹きの中、キズの子猿を見ることは二度となかった……

五 そして

変わった事態が私の興味を引くところとなった。なんとオスのナンバー2であるゲンを差し置いてナンバー3のジンがボス猿の地位に座ったのだ。どうしたことであらう。ジンとゲンが並んで仲良く歩く姿は今までにない光景だ。ボス猿の地位を奪われても「自分がボス猿である」とゲンは思っているのだから。全くもって不思議なことである。

三姉妹はというと、現在ユズはボス猿ジンを

を相手とし、キズはブンと離れたことで群れ内での位置づけを確保せず生活を送っている。三女グミは、最初から姉たちとは全く異なる生き様を選んだ。そして……

彼等はなにをしようしているのかな
 どこにいるのかな
 見えないって事が夢を育てるんだよね
 夢を追うって事は見えないものにどのくらい心を寄せていられるかってことなんだ

それそれぞれの生き様の中にこそ私が求めてきた納得いく姿があつた。

群れの中で辿る道。「生き様」この姿を見極めることができれば、彼等の世界を知り得たといつてもよい。非常に分かりやすい貴重なチャンスに巡り会えたといえよう。

順位はあつてもこの広い山の中にのびのびと生きていく。仲間を意識して行動していく譲るものは譲り、順位の中に示す行為は逆に仲間意識を強める。それこそが思いやりを育むことにつながっていく。

私の今知り得た自然。それは、どのように思いやりを持てるようになったか、自然とはいかに穏やかに親から子そして孫に生き様を引き継いだかである。

その努力こそ我々の胸を打ち、感銘を与え、生きることの素晴らしさを教えてくれる。

十年の歳月の中に見出した彼等との接点、体験を通した山の味わい、仲間意識の中で歩く山歩き……俺たちの山だもの心が通わないわけがない。

体験するってことは
 一步理解を深めることなんだ

(動物写真家)

